

自立活動の視点を取り入れた授業づくり ～生徒の困難さに寄り添う～

令和5年度山形県教育センター長期研修生（前期6ヶ月）
長井市立長井北中学校 新沼 希美

1 研究のねらい

昨年度、友人との関わりに困難さを抱える不登校傾向の生徒と一対一で何度も教育相談を重ねてきた。友人とのトラブルがある度、学年団の先生方と相談しながらその都度対応し、解決することを継続してきた。しかし、その後も同様の事態が生じ、根本的な解決に至っていないことを担任として課題に感じていた。

なぜ同じことが繰り返し生じているのだろう。子供たち一人一人の困難さを軽減するために、個にに応じてどのようなアプローチができるのか。生徒一人一人が安心して学校生活を送るために、教師としてできることはないかと考えた。

そこで、その生徒の困難さを軽減するために、自立活動^[*1]の視点からアプローチの方法を見出したいと考え、本研究テーマを設定した。

実践研究では、その生徒の困難さを軽減するアプローチ方法を設定するにあたり、その生徒に関わる複数の教員にも協力してもらい、客観的な情報の収集を試みた。そこから自立活動の流れ図^[*2]を活用して指導目標と、有効だと思われる具体的な指導内容を設定した。自立活動は、個別指導の形態で行われることが原則だが、指導目標を達成する上で効果的である場合には、児童生徒の集団を構成して指導することもある。本実践では、学級の仲間の力を借りて、支え合い助け合う集団活動を单元化し、困難さの軽減をねらうこととした。

2 研究の方法

- (1) 文献研究（自立活動・障がい特性の理解等）
- (2) 調査研究（アンケート調査・学校訪問）
- (3) 実践研究（指導計画全5時間）

3 実践研究

(1) 実態把握と流れ図の作成

昨年度までに把握している対象生徒Aの実態、Aとの対話、Aに関係する教員からの書面や対話による情報収集を主な実態把握の手段とした。

〈流れ図から導き出したAの具体的な指導内容〉

ア	対話を通して思いを引き出しながら、生活や学習環境を整えることで、安心して過ごすことができるようにする。
イ	本人が好きなことや得意なことなど、自己理解を広げる活動を他者と行い、自己や他者に対する見方を広げることができるようにする。
ウ	コミュニケーションの仕方を工夫し、安心して自分の気持ちを言葉で表現する経験を重ね、相談することのよさを実感できるようにする。

(2) 授業実践

〈目標〉

クラスの仲間と肯定的な気づきや考えを出し合う活動を通して、自己理解を深めるとともに、他者や自己に対する見方や考え方を広げる。

〈関連する指導内容〉※自立活動の6区分27項目より

2 心理的な安定	(1) 情緒の安定
3 人間関係の形成	(2) 他者の意図や感情の理解 (3) 自己の理解と行動の調整
5 コミュニケーション	(5) 状況に応じたコミュニケーション

〈指導過程〉全5時間※上段は活動名、下段は学習活動

1	魅力再発見 ・タブレットで友人のよさや魅力を伝え合う。 ・自分が選んだよさ・魅力と友人が選んだよさ・魅力を見比べ、気づきや思いを周囲と共有する。
2	あなたはどっち派！？～自分の選択肢を増やそう！～ ・学級内の生徒自身が抱える学校生活における悩みの解決法について、自分ならどうするかを4択で選択し、その理由をタブレット上のホワイトボードを用いて自由に述べ合う。
3	ブレインストーミング ～友達のを借りて、解決のアイディアをゲット～ ・学級内の生徒自身が抱える学習・生活・進路などの学校生活における悩みについて、解決の方法を自由な発想から出し合う。 ・ホワイトボードを活用し、発言を視覚化しながら話し合う。
4	ホワイトボードミーティング ～みんなで作戦会議！W・B・M～ ・学級内の生徒自身が抱える学習・生活・進路の学校生活における悩みについて、質問を通してその背景を深く知り、解決の方法を生徒の自由な発想から出し合う。 ・ホワイトボードを活用し、発言を視覚化しながら話し合う。
5	ミカタのミカタ～リフレーミング～ ・仲間の短所を、違う角度から考え、長所に言い換える。

(3) 実践研究の成果（○）と課題（▲）

- 客観的な実態把握と分析による深い生徒理解。
- 困難さに寄り添う指導内容の設定と実践。
- 教師同士のチーム意識の高まり。
- 学級全体の自己有用感・自己肯定感を高める、支え合い助け合う関係を大切にした学級づくり。
- ▲困難さのさらなる軽減を目指す指導の積み重ね。
- ▲自己指導能力を高める支援。

[*1] 自立活動とは、特別支援教育に特別に設けられており、「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う」ものである。

[*2] 流れ図とは、実態把握で収集した情報を様々な観点から整理し、具体的な指導内容を設定するための流れを示したものである。

4 研究のまとめ

対象の生徒は、仲間と関わり合い、自分のよさや可能性を改めて伝えてもらったり、仲間の悩みに対して自分が力になったりしたことで、自己肯定感や自己有用感を感じていたように思われる。また、その生徒だけではなく、学級全体における自己肯定感・自己有用感の高まりが感じられた。本研究では学級活動の実践だったが、仲間と共に課題解決に向かう生徒の力を信じ、どの教科においてもつながりや関わりを大切にした授業づくりをしていくことは、学校内における安全・安心な風土の醸成につながると感じた。

この研究から、特別支援教育における自立活動の視点を生かし、なぜその困難さが生じているのかを理解していくことは、生徒が抱える見えにくい困難さを軽減していくために必要な視点であると感じた。流れ図を活用する中で、これまで見えにくかった困難さに気付いたり、長所やよさを改めて確認したりすることができ、その実態把握から得た生徒の情報を整理・分析することができた。また、そこから導き出した具体的な指導内容を実践していくことは、個に応じたアプローチを行い、指導の効果を高めるために有効であると感じた。

これからも特別支援教育の視点を生かし、誰もが安心して学校生活を送ることができるよう、困難さを抱える生徒を中心に教員同士が支え合い、個に応じて生徒と共にアプローチしていきたい。そして、一人一人の存在を大切に、共に考え、共に学び、成長していく伴走者として、実践を重ねていきたい。

5 調査研究協力校

(1) 研究会及び事後研究会への参加

- ・長井市立西根小学校
- ・長井市立長井小学校
- ・長井市立長井南中学校
- ・上山市立中川小学校

(2) 特別支援学級における授業の参観及び担当者への聞き取り

- ・米沢市立興譲小学校
- ・米沢市立松川小学校
- ・米沢市立第四中学校

(3) 学校説明会への参加

- ・山形県立米沢養護学校
- ・山形県立山形養護学校

6 引用・参考文献

- ・文部科学省 (2018)「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編」開隆堂
- ・文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 (2021)「障害のある子供の教育支援の手引～子

供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～」

- ・文部科学省 (2022)「生徒指導提要」
- ・文部科学省国立教育政策研究所 (2015)「生徒指導リーフ Leaf. 18 「自尊感情」？ それとも、「自己有用感」？」

生徒指導・進路指導研究センター

- ・山形県教育センター (2022)「特別支援学級ハンドブック 令和4年度版 -」
- ・山形県教育センター (2013)「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりハンドブック」
- ・授業のユニバーサルデザイン研究会 (2014)「授業のユニバーサルデザイン Vol. 7」東洋館
- ・喜多好一 (2019)「通級指導教室 発達障害のある子への「自立活動」指導アイデア 110」明治図書
- ・喜多好一 (2022)「通級指導教室 発達障害のある子への「自立活動」指導アイデア 111 Part2」明治図書
- ・岩瀬利郎 (2022)「発達障害の人が見ている世界」アスコム
- ・西川幹之佑 (2022)「死にたかった発達障がい児の僕が自己変革できた理由 -麹町中学校で工藤勇一先生から学んだこと」時事通信社
- ・文部科学省 (2017)「中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 特別活動編」開隆堂
- ・文部科学省 国立教育政策研究所文部科学省 国立教育政策研究所 (2020)「指導と評価の一体化」のための 学習評価に関する参考資料 中学校 特別活動
- ・佐藤節子 (2021)「ホワイトボードのできる解決志向のチーム会議 未来につながる教育相談」図書文化
- ・國分泰孝・國分久子 (2004)「構成的グループエンカウンター事典」図書文化
- ・國分康孝 他 (2001)「エンカウంటースキルアップ ホンネで語る『リーダーブック』」図書文化
- ・『月刊学校教育相談』編集部 (2022)「シンプルな12のワークが子ども同士の関係性を劇的に変える」ほんの森出版
- ・黒沢幸子・渡辺友香 (2017)「解決志向のクラスづくり完全マニュアル」ほんの森出版
- ・大前暁政 (2023)「心理的安全性と学級経営」東洋館出版社
- ・古屋和久 (2018)『学び合う教室文化』をすべての教室に 子どもたちと共に作る教室文化」世織書房
- ・金子奨 (2008)「学びをつむぐ〈協働〉が育む教室の絆」大月書店